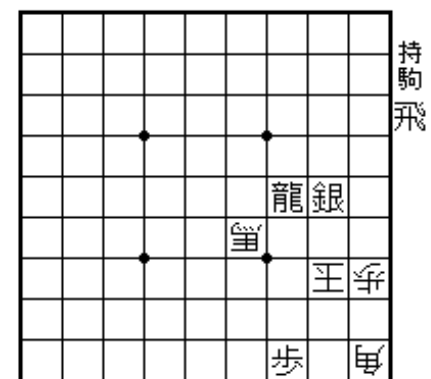


## 解説の部

### 第1番



▲16銀 △18玉 ▲27銀 △同玉 ▲23飛 △18玉

▲29飛成△同玉 ▲38龍迄9手。

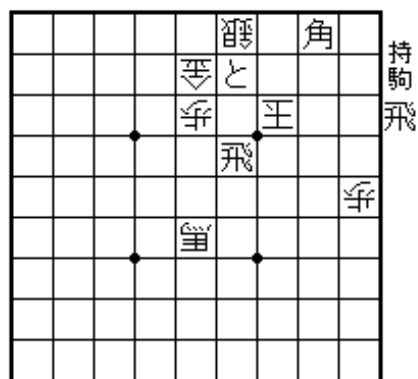
\*3手目(7手目)38龍は28角成で不詰。

まずは詰将棋の定番ともいえる邪魔駒消去の手筋物。直感がすべての作品ではないかと思う。

大雪で大渋滞となった通勤帰りのバスでふと思い浮かんだ筋をそのまま凶化できたもの。こういうことは私にはめったにないので、無条件でお気に入り作品である。たまにはいいことなくては、ね。

(将棋マガジン H7・4)

第2番



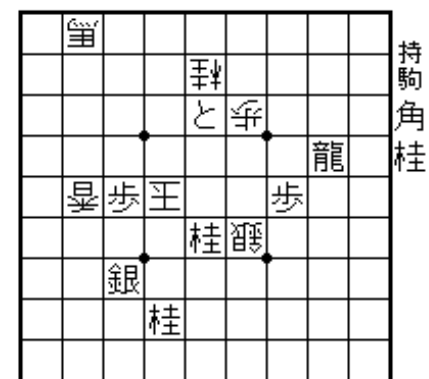
- ▲43角成△22玉 ▲21飛 △12玉 ▲14飛 △13桂
- ▲11飛 △同玉 ▲13飛成△12金 ▲44馬 △33桂
- ▲同馬 △21玉 ▲22馬 △同金 ▲33桂 △同金
- ▲31と △同玉 ▲33龍 △32銀 ▲43桂 △同金
- ▲22金 △41玉 ▲32龍 △51玉 ▲62銀迄29手。

筋が悪そうで少しやりにくい序の4手を経て始まる合駒問題。3度も出てくるのでいやになってしまいそうだが、実は全部楽勝。たとえば6手目香合は15手目から12龍、同玉、14香だ。

あまり私らしいところがないが、「43馬、12玉」の形から手順を割り出すという慣れない作り方のせいかな。解説者の服部敦氏に「でもやっぱりハデハデな構想作の方が市島さんらしくていいな」と書かれ、喜んでいいのか悪いのか、複雑な思いを味わった。

(近代将棋 H7・6)

第3番



- ▲92角 △83歩 ▲同角成 △55玉 ▲82馬 △73金
- ▲67桂 △65玉 ▲74龍 △同金 ▲55馬 △同銀
- ▲66歩 △同銀 ▲76銀迄15手。

\*6手目他合は9手目83馬以下。

順位戦B級出品。順位戦は解答者の評点により順位が決まるので、派手目に作ると意外とうけたりする。変化・紛れが浅く、自信はなかったが…

詰鬼人「角の押売りから大駒連続捨てと、調子の良い手順です」

梅本拓男「初手ひとめだが金の中合から華麗なる収束。文句なし」

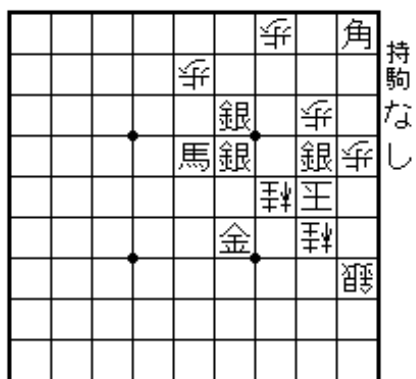
解説・池谷武大「(前略)2手目桂合予防のためのさりげない4桂配置も好

ましく、手順の流れ、密度、まったく非の打ち所がない」

と予想外の評価でトップ昇級。4桂配置が好ましいワケもないのだが。もらった歩をうまく使える収束を発見できたのがラッキーだった。

(詰将棋パラダイス H9・6)

第4番



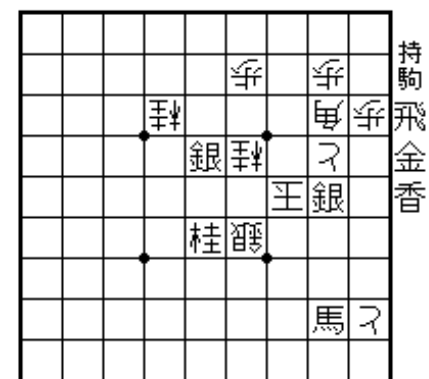
- ▲34銀生△16玉 ▲25銀 △同玉 ▲43馬 △24玉
- ▲42馬 △25玉 ▲52馬 △24玉 ▲42馬 △25玉
- ▲43馬 △24玉 ▲33馬 △25玉 ▲34馬 △15玉
- ▲33角成△24桂 ▲25馬 △同玉 ▲34馬 △15玉
- ▲16歩 △同桂 ▲25馬 △同玉 ▲35金 △15玉
- ▲27桂迄31手。

森田手筋の基本形に馬鋸を絡ませた軽趣向作。解答用のPNで発表。

詰パラはPNの作家が結構多いが、短編で有名な塩見倫生氏や中編の第一人者酒井克彦氏などは、PNと本名の使い分けがよくわからない。私もたまに人に聞かれるが、「肩の力が抜けたような作品だとPN」と答えることにしている。理解してもらえてるかなあ？

(詰将棋パラダイス H7・6)

第5番



- ▲26金 △同玉 ▲27香 △35玉 ▲36飛 △同桂
- ▲24銀 △34玉 ▲35歩 △同銀 ▲23銀生△33玉
- ▲55馬 △同桂 ▲22銀生△32玉 ▲44桂 △同銀
- ▲23角 △22玉 ▲41角成△11玉 ▲12歩 △同玉
- ▲23馬 △11玉 ▲22馬迄27手。

某月某日、お世話になっている阿部健治さんからTELあり。しばしの雑談の後、氏曰く、

「香先飛香ってできないかなあ？」

言われた瞬間は全くイメージできなかった。持駒に飛と香があって、飛を先に打つと詰まなくて香を先に打つと詰む。しかも不利感が主題になるので後で打つ飛は捨駒でなくてはならない、といったところか。

「ちょっと面倒そうですねえ、私なんかより\*\*氏(有名な構想作家)に頼んだ方がいいんじゃないですか」

「そうか、やっぱり難しいか。じゃあ氏に頼んでみるか」

そこで思ってもないことを私は言ってしまう。

「でもちょっと待ってください。考えてみますから、1か月くらい時間ください」

頼まれるとできるできないに拘らずやりたくなくなってしまうのが私の悪い癖。ちょうどその頃は作図中のネタが無かったこともあった。しかし何が幸いするかはわからないもので、それのおかげでこの作品に出会えた。

創作期間僅かに1週間。バカツキだったのは舞台装置である28馬や56桂を捌く手が入り、銀の縦送りの趣向っぽい手順になったこと。この構想の作品の表現方法としては理想的な構成だったと思う。

神谷薫「らしくない退屈な手順と思いながら進めて、最後に駒台の香と取り替える」

流山智満「効果が表れるまでが長い伏線の香先飛香。桂や馬まで捨駒として捌いているのがすごい」

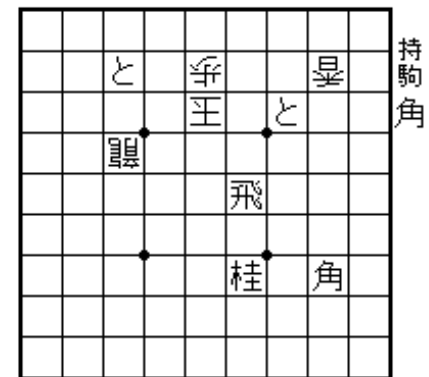
え？でどうして3手目27飛じゃ駄目なんだって？さあてねえ。

↑

全然解説してない。

(詰将棋パラダイス H9・3)

## 第6番



▲75角 △54玉 ▲55飛 △44玉 ▲53飛成△同歩  
▲66角迄7手。

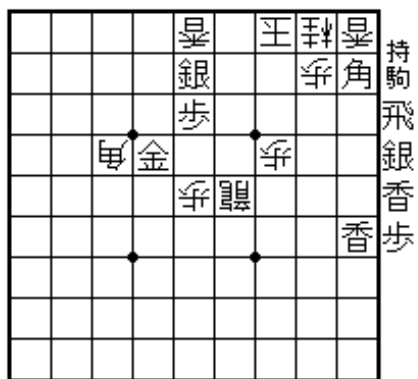
密度が求められる超短編の分野はこう見ても結構好きで、特に7手詰だと、もう最初から「7手にする」と手数設定をして作っていることが多い。

初手75角が限定打。取ると43飛成以下簡単なので54玉とよろける。それに対して55飛が攻駒のバランスを崩してやや不安感を伴う一着。44玉でもうどうしようもないようだが、そこで思い切って53飛成と歩頭に成り捨て、66角と引くとあら詰んでる。初手86角だと最終手77角となり、同龍と取られてしまう、というわけである。

緊張感を出せて満足のいく一品。平成7年の詰将棋サロン佳作。

(将棋世界 H7・5)

第7番



- ▲33香 △32桂 ▲同香成 △同玉 ▲43銀打△同龍
- ▲同銀 △同玉 ▲35桂 △同歩 ▲44歩 △32玉
- ▲34飛 △33桂①▲43歩成△同玉 ▲44飛 △同玉
- ▲24飛 △43玉 ▲21角成△32桂 ▲54金 △42玉
- ▲44飛 △同桂 ▲43金 △41玉 ▲32金迄29手。

①33香合は43歩成、同玉、44飛、32玉、42飛打、31玉、41飛成、同角、21角成以下。また、33桂打は作意どおり進めて桂余り。

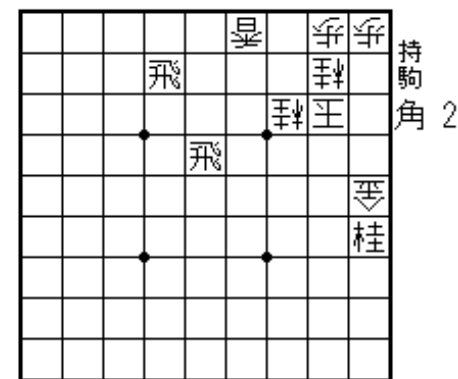
一応実戦形だがこれは偶然そうっただけ。主眼は35桂から飛を打ちかえるあたりで、特に44歩は一見届きそうにないだけに打ちにくいのではないかと思う。

鈴木章夫「連続した桂合は見事。21手目21角成が見えなかった」

序は苦し紛れの産物。初形の玉位置の安定感から採用した。上記のように好意的に見られるのは意外で、嬉しく思った。また、投稿一余詰返送を何度も繰り返し、検討者の小林徹氏に再三お世話になった。

(詰将棋パラダイス H10・4)

第8番



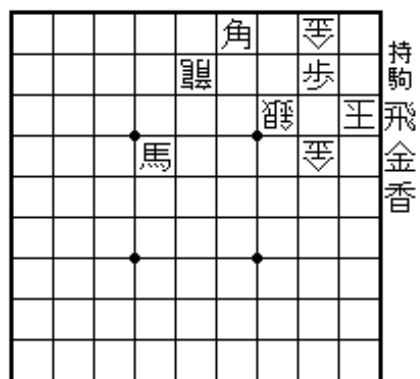
- ▲32飛成△同玉 ▲24桂 △23玉 ▲32角 △13玉
- ▲12桂成△同玉 ▲14飛 △同金 ▲23角打△13玉
- ▲14角成△同桂 ▲23金迄15手。

詰方大駒4枚だが、連携が悪く、意外と手が続かない。初手32角で悩んだ後、32飛成～24桂でなるほど、と思ってもらえれば…という作品。

41香を発表時より追加。これがないと5手目41角が成立し、さらにそれが10手目の変同にも絡んで味が悪い。余計な駒を置く気になれずそのまま投稿し、解説の金子義隆氏に「確信犯」と書かれたが、42飛を離して配置するとバランスも悪くないかな、と思い直して今回は配置。性格が丸くなったんですかね。(笑)

(詰将棋パラダイス H7・6修正)

第9番



- ▲14飛 △22玉 ▲13飛成△同玉 ▲31馬 △同金  
▲14香 △同金 ▲23金迄9手。

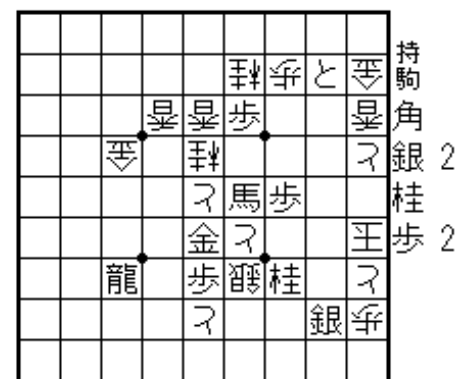
22歩が邪魔駒でそれを消しに行くのだが、初手14香では3手目13香成に11玉で詰まない。そこで先に飛を使えば成っても縦の効きが残るので同玉と取る一手、という仕組み。打歩詰を利用しない飛先飛香は結構珍しいと思う。

発表時64馬を53馬にしていたらアッサリ余詰。この病気だけはなんとかしたいんだが。

将棋マガジンはこの年休刊。最後の発表作となった。初入選を飾らせてもらっただけにぜひとも復刊してほしいと思う。

(将棋マガジン H7・10修正)

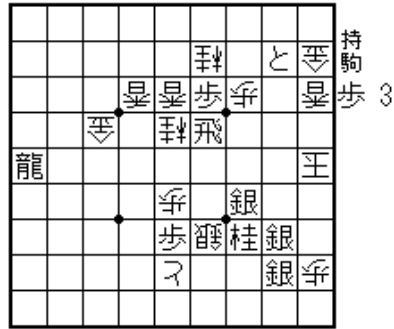
第10番



- ▲27銀打△15玉 ▲33角 △同歩 ▲26銀打△24玉  
▲25歩 △同と ▲同銀 △15玉 ▲16歩 △同と  
▲同銀引 △14玉 ▲15歩 △24玉 ▲36桂 △同と  
▲25銀 △15玉 ▲16銀上△26玉 ▲27歩 △同と  
▲同馬 △35玉 ▲45金 △同と ▲同馬 △26玉  
▲44馬 △35飛 ▲同馬 △同玉 ▲55飛 △45歩  
▲同飛 △26玉 ▲86龍 △56歩 ▲27銀引△15玉  
▲36銀引△14玉 ▲44飛 △15玉 ▲95龍 △85歩  
▲同龍 △同金 ▲45飛 △14玉 ▲15歩 △24玉  
▲35銀 △15玉 ▲16歩 △14玉 ▲44飛 △34歩  
▲15歩 △同玉 ▲26銀上△16玉 ▲25銀 △15玉  
▲24銀左△26玉 ▲15銀 △同玉 ▲16歩 △26玉  
▲27歩 △35玉 ▲45飛迄75手。

銀知恵の輪を舞台に、打歩詰回避に必要な歩の数をどのように入手するかをキーにした謎解き風作品。ポイントは2か所で、35手目54の桂の

質に見て一間離して打つ55飛と、77の龍を86~95にもってくるところ(下図)である。特に後者はちょっぴりマニアックで他のやり方・他の場所では詰まない仕組みにしている。



途中図(95龍まで)

筋ワル生「45手目44飛がなかなか見えなかった。楽しめた」

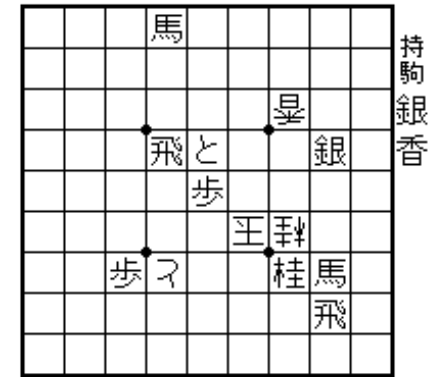
梅本拓男「よく考えると単なる打歩詰作品なのにこれほどややこしいとは思わなかった。55飛~86龍が鍵」

46手目の歩合の位置が非限定なのと配置駒数が多いのが指摘された。前者は作者としてはどうでもいい(これが性格)のだが、後者については推敲の余地があったかもしれない。改めて見ると、もっと泥沼にしちゃいたい衝動に駆られる(これも性格)。

解説の首猛夫氏にはTELまでいただくなど、だいぶ擁護してもらい大変嬉しかった。こういうことがあるので、詰将棋はやめられない。

(詰将棋パラダイス H7・8)

第11番



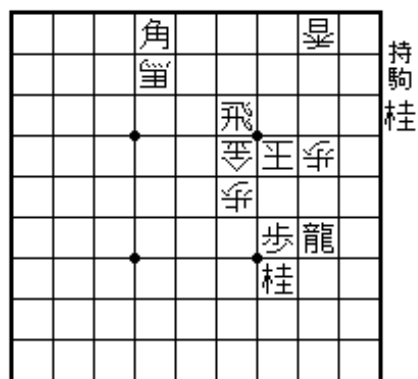
- ▲35銀 △同香 ▲47香 △57玉 ▲46銀 △47玉
- ▲67飛 △57銀 ▲83馬 △46玉 ▲48飛 △同桂成
- ▲47歩 △同成桂 ▲56馬 △同玉 ▲45馬迄17手。

「あぶりだしを作ってみませんか?」という阿部健治さんからの誘いに乗って作った久々の曲詰。ところが納品までに1年もかかったため、やっと投稿したら氏が担当する高校の在庫にはもうあぶりだしがなくなってしまっていた。(笑)

1年かかったのは良い素材になかなか行きあたらなかったことに尽きる。また、この(収束の)素材を見つけてからも完成にいたるまで時間をかけた。それでも紙一重の紛れを乗り越え(今でも自信がない)、なんとか思うとおりの手順設定に仕上げられた姿を見ると、安易に流れずに良かったと心から思う。半期賞受賞作。

(詰将棋パラダイス H9・5)

第12番



- ▲35龍 △同金 ▲26桂 △同金 ▲35歩 △同馬
- ▲53飛成迄7手。

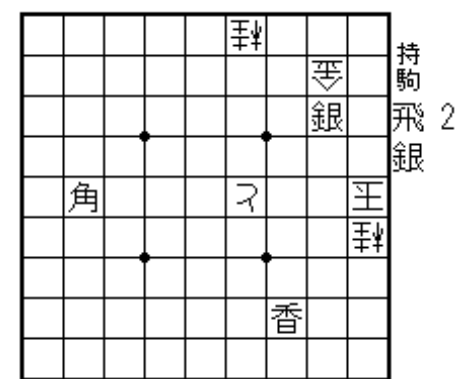
ちょっと不思議な手順なのに憧れてしまう。35歩ではなく35龍。3手目も同歩ではなくわざわざ逃がす26桂。で何も無くなったところに35歩。紛れがなく易しいが、それはあまり気にしていない。

曲詰の岡本真一郎氏や軽作短編の野村量氏など、作風が顕著な人の作品群はなかなか魅力的だと思うし、相馬康幸氏にいたっては芸術家として尊敬してしまいが、自分は器用ではないし、自分がそのとき作りたかったものを作っていくしかないかな、と思う。

ただたまに、推敲不足に目を向けず、徒に駒が多いのを作風と勘違いしている作家も見受けられる。正直なところ苦々しく思う。妄言多謝。

(詰将棋パラダイス H9・3)

第13番



- ▲14飛 △26玉 ▲24飛 △25歩 ▲同飛 △同玉
- ▲27飛 △26飛 ▲52角成△15玉 ▲24銀 △同飛
- ▲14銀成△同玉 ▲24飛 △同玉 ▲34角成△13玉
- ▲14歩 △同玉 ▲24飛 △13玉 ▲22飛成△同玉
- ▲23金 △21玉 ▲43馬 △11玉 ▲21馬 △同玉
- ▲32香成△11玉 ▲22成香迄33手。

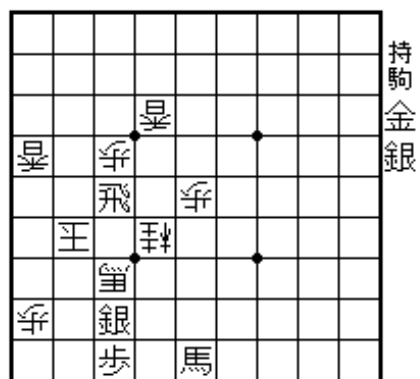
軽い捌きの作品。初手単に25飛とせず合駒を稼ぎに行くことさえ発見できれば後は容易だろう。

本作も修正図。投稿後阿部健治さんに見せて余詰指摘を受けていたにもかかわらず、「ま、編集部で気付いてボツにするだろう」と決め付け、そのまま載ってしまった。自分も気付かなかったくせに、バカな話である。詰将棋に対して失礼だった。若気の至り(←もう若くないって)ということでお許しを。

(近代将棋 H8・7修正)



第14番



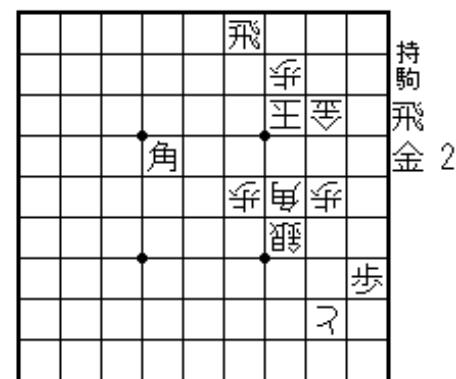
- ▲85金 △96玉 ▲95金 △同香 ▲87銀 △97玉  
 ▲88銀 △同玉 ▲77馬 △79玉 ▲13角 △89玉  
 ▲78銀 △同桂成 ▲79角成△同成桂 ▲85飛迄17手。

3手目87銀打は同馬、同銀、97玉で、また7手目86銀打は88玉  
 でいずれも作意どおり進めると最終手ができないような仕組みになっ  
 ている。収束はド派手だが実は既成手順。「この収束を逆算してどれだけ手順を  
 欲張れるか」が作図のテーマだった。

投稿直前に斉藤吉雄氏が同じ収束で1作拵えたのを見せてもらい、もう  
 封筒に入れてしまっていることを理由に自作は詰バラにそのまま投稿、氏  
 には近代将棋と住みわけ?してもらった。結局氏の作品が先に誌面に載っ  
 て塚田賞受賞。「斉藤吉雄氏の塚田賞作品を思い出したが、それに劣らない  
 好作(尾形充)」という評を見て思わず苦笑い。ばれちゃったか。

(詰将棋パラダイス H9・3)

第15番



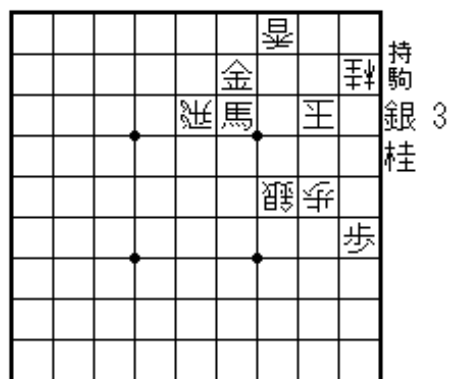
- ▲55角 △24玉 ▲34金 △同金 ▲15金 △同玉  
 ▲11飛成△13角 ▲16飛 △24玉 ▲13龍 △35玉  
 ▲24龍 △同金 ▲53角 △34玉 ▲44角成△23玉  
 ▲12飛成△同玉 ▲22馬迄21手。

初手がぼんやりして、やややりにくいか。2手目44金合は43飛打～  
 44飛成で詰む。さらに34金、15金と連続捨てし、11飛成からの大  
 立ち回りへ。変化は浅いが詰上がりまで単純に楽しめる仕掛けになっ  
 ていると思う。

初手42角成は44玉、54金、34玉(同玉は詰む)、43馬、24玉、  
 34飛、同金、同馬、14玉!でぎりぎり逃れる。発表時にこれが詰むと  
 勘違いされて余詰扱いされたのはちょっと残念だった。

(近代将棋 H7・12)

第16番



- ▲15桂 △13玉 ▲22銀 △同玉 ▲32金 △同香
- ▲23銀 △13玉 ▲22銀打△24玉 ▲33銀生△同香
- ▲14銀成△同玉 ▲32馬 △24玉 ▲23馬迄17手。

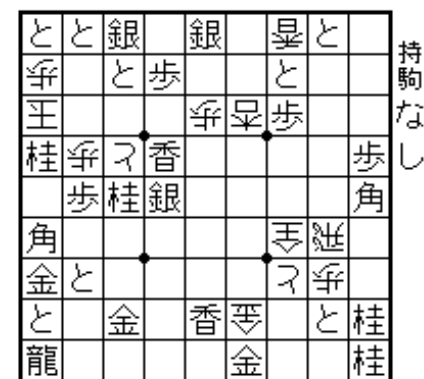
一見普通の手筋物だが、5手目32金が12手目13玉に備えた変化伏線の構想物。手順全体をゼンマイを回すような感触で纏められた。こういう「会心の小品」系の作品はあんまりうけないかな、と思っていたが…  
池田俊哉「32金の一手が手順に深い意味を与えている」  
白石連太郎「本当にいいと思った作品には多くは語らなくていいでしょう。」

傑作」

というわけで好評ばかり、山下雅博氏の名解説もあり、大感激した。  
福島竜胆「小品だがとてもいい。やはりこの作者は信用できる。苦手だが」  
…いやそんな、苦手だなんて言わないでください。(苦笑)

(詰将棋パラダイス H10・1修正)

第17番



- ▲92と △94玉 ▲95歩 △同玉 ▲86金 △94玉
- ▲93と △同玉 ▲83桂成△94玉 ▲84成桂△同と
- ▲95歩 △同と ▲同金 △同玉 ▲86と △同玉
- ▲87と △95玉 ▲86と △同玉 ▲77金 △同玉
- ▲97龍 △66玉 ▲86龍 △65玉 ▲87角 △64玉
- ▲66龍 △74玉 ▲65角 △85玉 ▲76龍 △94玉
- ▲83角生△同玉 ▲85龍 △72玉 ▲74龍 △81玉
- ▲83龍 △71玉 ▲61歩成△同玉 ▲63龍 △51玉
- ▲53香生△同成香 ▲52歩 △同成香 ▲41と △同玉
- ▲31と △同玉 ▲32歩成△同玉 ▲52龍 △21玉
- ▲22歩 △同飛 ▲同龍 △同玉 ▲23香 △同玉
- ▲33飛 △14玉 ▲34飛成△15玉 ▲27桂 △同成銀
- ▲16歩 △同玉 ▲17香 △同成銀 ▲同と △同玉
- ▲37龍 △18玉 ▲19歩 △29玉 ▲39金 △同金
- ▲18銀 △19玉 ▲39龍 △18玉 ▲28金迄89手。

いつかは…と夢見ていた煙詰。創作期間は約1か月弱で、大したことないようにも思えるが、実はこの期間中が大変。ほとんど仕事も手に付かず、トイレに入れば床のタイルが盤面に見えてきて自然に作りかけの図が浮かんでくるといった按配。やはり夢をかなえるってのは大変なことだ。最後の最後、19桂・27歩の配置の発見もやはりトイレの中で、これがないと唯一のセールスポイントである角生が変化長で成立しない。完成したときは喜びよりも疲れを感じたのを覚えている。

内容はさっぱりで特に後半は既成手順の嵐。前半部分でやっと新作、といったところか。

五茂須光「既成手順がやや多いくらいはありますが、86金限定と83角生のポイントは高い」

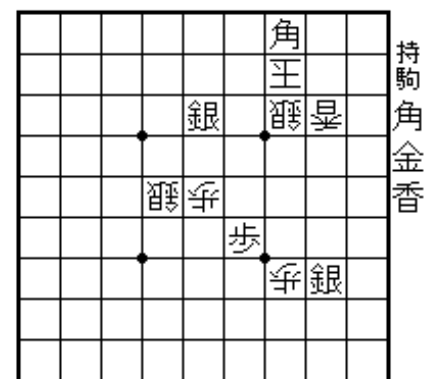
阪口和男「伏線あり、角生ありの前半は絶品。非限定がないのも高く評価できる」

発表時は酷評にさらされるのを覚悟していたが、解説の新ヶ江幸弘氏をはじめ、解答者の皆さんにも温かい評をいただき、これには完成したときよりもよほど感激した。やはり解答者は神様である。

発表時余詰を修正。たとえ前の図が完全であってもこちらの方が手順の完全限定を保った上で自陣成駒が減っているので良いと思う。とどのつまり、推敲不足ということでこれには反省する次第。

(詰将棋パラダイス H7・5修正)

## 第18番



- ▲22金 △同銀 ▲34香 △33銀①▲同香成 △同玉
- ▲42角成△34玉 ▲44銀成△同玉 ▲26角 △同香
- ▲45銀 △35玉 ▲36銀上△46玉 ▲24馬迄17手。

①銀打合は4銀使用のため不可。33飛合は42銀成、21玉、32角、12玉、22角成、同玉、33香成、同玉、43飛以下同手数駒余り。

若島正氏「恋唄」第57番と同じ詰上がりからの逆算。珍しくこれがうまくいき、初手金を捨てる不安感、4手目ぎりぎりでも割り切れる変化など意図しないところにツキが働いた。11手目が主眼手。

下舞斜太「序盤、手がつけにくい。その分、収束の爽快感が増した」

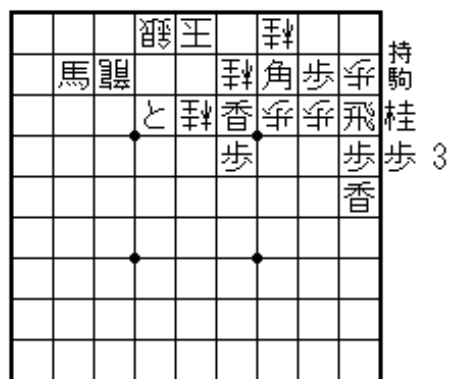
酒井弘格「序の2手に悩むが後は理想の手順がそのまま出現した」

解説・阿部健治「玉方33銀をあっというまに手駒にしてしまうマジックのような手さばき。接着剤の動きをする44銀成。全く無駄のない緻密な構成です」

この頃から手順のバランスに気を使うことが多くなった。

(詰将棋パラダイス H7・7)

第19番

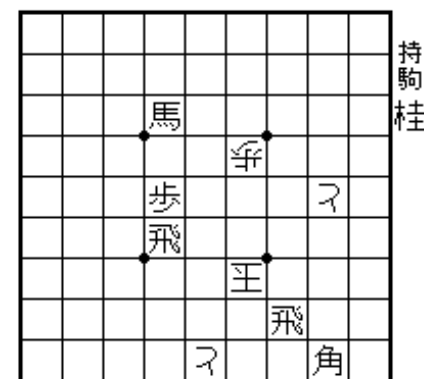


- ▲42香成△同玉    ▲43歩成△同桂    ▲54桂 △32玉
- ▲44桂 △22玉    ▲12飛成△同玉    ▲13歩成△11玉
- ▲12歩 △21玉    ▲22歩 △31玉    ▲32歩 △41玉
- ▲42歩 △51玉    ▲73馬 △同龍    ▲41歩成△同玉
- ▲31歩成△同玉    ▲21歩成△同玉    ▲11歩成△31玉
- ▲22と △同玉    ▲12香成△31玉    ▲21と △41玉
- ▲32桂成△同玉    ▲22成香△41玉    ▲31と △51玉
- ▲42桂成△同玉    ▲32成香△51玉    ▲41成香迄47手。

玉が2往復するだけの全くのお遊び作品。最終手が不自然に41成香なのもまさしく作者のお遊び。なんで41とにしなかったのかが不思議でしたら、うん、そのときは盤に並べてみましょうか。

(詰将棋パラダイス H7・10)

第20番



- ▲98飛 △37玉    ▲27馬 △同玉    ▲39桂 △17玉
- ▲18飛迄7手。

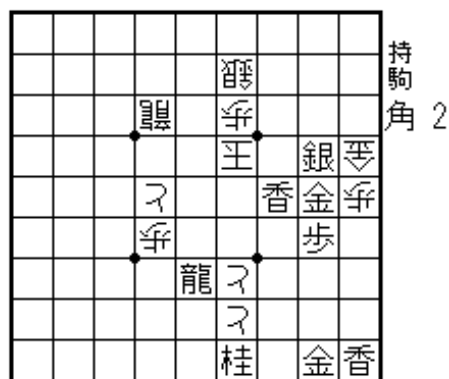
飛の最遠移動がテーマ。意味づけは変化で取られないため、という古いものであるが、最終手にもう一度動かすことで面白くなったと思う。7手で飛車が端から端まで動くというのは記録かも？

自作の中で指将棋派に見せて一番受けるのがこの作品で、町道場4段位でもまず10分では解けない。これで次の第21番とか見せると、解こうともしないし、手順を見せても「ふーん」で終わりだからイヤになる。

PNで発表。半期賞受賞作。

(詰将棋パラダイス H8・9)

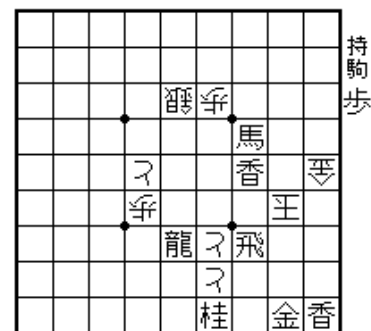
第21番



- ▲34金 △45玉 ▲44金 △同玉 ▲71角 △53龍
  - ▲同角 △同銀 ▲45飛 △同玉 ▲23角 △34飛
  - ▲同角成 △36玉 ▲37飛 △26玉 ▲15銀 △同金
  - ▲36飛 △同玉 ▲37歩 △26玉 ▲66龍 △同と①
  - ▲27歩 △同玉 ▲45馬 △26玉 ▲36馬迄29手。
- ①46飛合は同龍、同と、27歩以下変同。

テーマを先に決めて創作、という点では第5番と同じ。題して「不利合駒のための不利合駒」。

6手目に注目。ここでは53歩の方が強力な龍が残るので良いようだが、そうすると同角、同銀、45歩、同玉、23角としたときに34歩、同角成、36玉、37歩、26玉、15銀以下簡単に詰む。ところが、53龍とわざと詰方に龍を渡し、捨ててもらふことによって、23角に34飛合とする手段が生じて、次頁途中図のように詰方を打歩詰に誘致することができるのである！



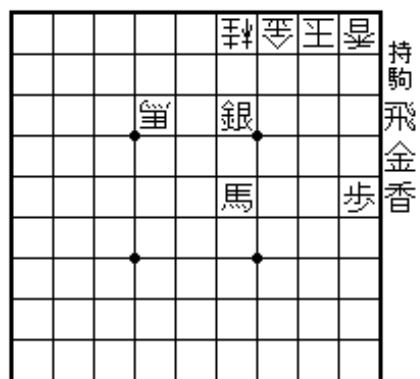
途中図 (15同金まで)

そこで詰方は36飛から37歩と不利打換えを行なうことによって、打歩詰を打開して詰ます、というストーリー。ファーストトライでは舞台設定がまずく、できたことはできたが盤面20枚を軽々超える超悪形。ここでくさらずにもう一度舞台装置探しからやり直したのが幸いし、まったく無駄のない初形と手順にできた。詰パラ500号の記念号に掲載されたこともあり、おそらくは私の代表作になると思う。

創作の際は安江久男氏、波崎黒生氏（氏は中学の？年先輩）の両氏をはじめ、多くの方に大変お世話になった。この場で御礼申し上げたい。半期賞受賞。打歩詰大賞優秀作。

(詰将棋パラダイス H9・11)

第22番



- ▲24香 △22桂 ▲同香成 △同金 ▲12馬 △同香  
▲31飛 △同玉 ▲23桂 △同金 ▲32金迄11手。

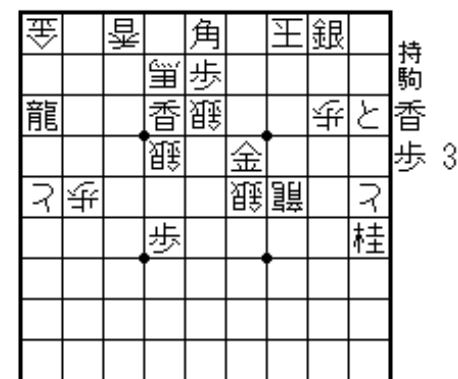
いつ振り返っても感じることだが、この作品は自作ではないような気がする。あまりに出来すぎている。

無論序の4手が発見できなくて7手の素材を何年も抱えていたのは間違いなく自分だし、また、2手目の変化が全て割り切れていて、しかもこの作意の22桂合の場合のみ驚愕の捨駒12馬が成立、という手順構成を最重視している面も私らしい。でもほとんど全てが思い通りにいってしまったせいか、自分で作ったのではなくて、そのときだけ何か別のものが自分という身体を借りて作ったのではないか、という風感じてしまう。

それともいつか、こういった感触は失せていくのだろうか。だとしたら、そのとき初めて、これは市島啓樹作となるのだろう。

(詰将棋パラダイス H8・7)

第23番

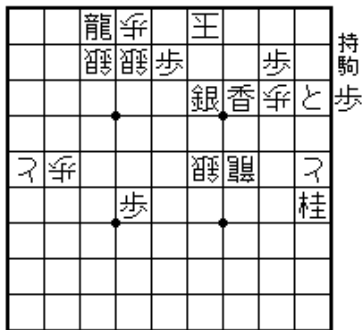


- ▲32歩 △21玉 ▲22歩 △32玉 ▲24桂 △同歩  
▲33歩 △41玉 ▲43香 △31玉 ▲42香成△同銀  
▲同角成 △同玉 ▲43銀 △41玉 ▲51歩成△同玉  
▲62香成△同玉 ▲53金 △同銀 ▲51角 △72玉  
▲73角成△61玉 ▲51馬 △72玉 ▲61馬 △81玉  
▲71馬 △同玉 ▲75香 △74歩 ▲同香 △72歩  
▲91龍 △62玉 ▲73金 △同歩 ▲82龍 △72金Ⓞ  
▲73香成△51玉 ▲52歩 △41玉 ▲42歩 △同銀  
▲32銀生△52玉 ▲72龍 △53玉 ▲42龍 △64玉  
▲65金 △73玉 ▲74銀 △84玉 ▲82龍 △94玉  
▲83龍迄61手。

打歩詰をテーマにした構想長編。なかなかの珍構想のつもりである。

ポイントは5手目の局面。33香と打つのがごく自然。しかし、以下41玉、42歩、同銀、同角成、同玉となり、作意どおりに進めると玉方はⓄで72銀合と変化する。以下73香成、51玉、71龍、61歩、62成

香、同銀、52歩、41玉（失敗図）となってみると、なんと打歩詰で詰まないのである！



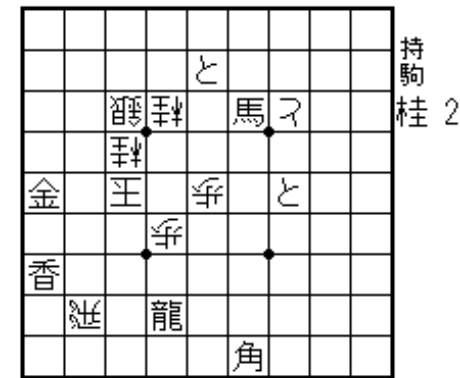
失敗図（41玉まで）

5手目24桂と捨てておいて33歩と打つのが妙手順。31玉なら21歩成、同玉、23香（これが24桂の効果）で詰む。こうしておけば盤面に残るのが33歩なので、④62銀合は先ほどと同じ順で進めて失敗図の局面で42歩、31玉、32銀成で詰み、というわけである。主眼手以降も馬追いの趣向あり、歩の二段中合ありで退屈しない。収束こそ流れたが構想長編としては申し分ないと思う。

この作品は近代将棋H7・5に発表した作品（余詰）を阿部健治さんのおすすめで修正改良したもの。これまた氏のご厚意で、解答つきながら詰パラに載せてもらった。本当に氏にはお世話になっている。また、掲載後に不詰指摘をいただいた伊田勇一さんにも御礼申し上げたい。

（詰将棋パラダイス H9・3修正）

## 第24番



- ▲78龍 △77歩 ▲87桂 △同飛生 ▲77龍 △同飛生
- ▲85金 △64玉 ▲76桂 △同飛生 ▲75金 △同桂
- ▲65歩 △63玉 ▲27角迄15手。

初形からして怪しげだが、手順もそれに劣らず訳がわからない。解かずに見た人はきっと驚くのではないかと思う。

簡単に説明。初手77龍は64玉で飛の横効きが通っているため逃れ。3手目取らないのも同じ理由。2手目同飛は85金～76桂で詰み。4手目以降同飛生とするのは11手目の局面で意味がわかるだろう。ひとつひとつは難しくないので確認してほしい。

白石連太郎「短評にならなくなりそうなので、一言、出来すぎです」

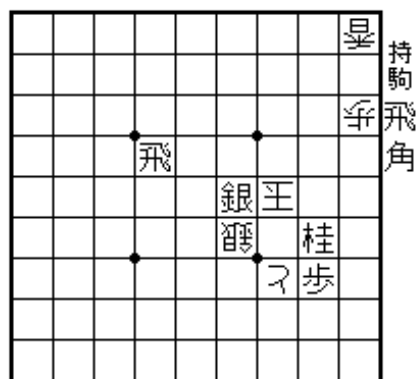
金屋敏彦「飛が馬鋸のように動く姿が面白い」

松本智徳「うまいというより面白い、とっては失礼？」

いえいえ、一番嬉しい短評です。

（詰将棋パラダイス H8・6）

第25番



- ▲33飛 △25玉 ▲34角 △35玉 ▲12角生△25玉
- ▲36銀 △同と ▲34角生△15玉 ▲13飛生△同香
- ▲16歩 △24玉 ▲43角成△23玉 ▲24飛 △同玉
- ▲34馬迄19手。

その日の宿泊先である柳田明氏宅に辿り着くと、もうすでに山下雅博氏と藤沢秀樹氏が先着していて、盤駒をサカナに一杯やっていた。早速輪に加わり、作ったばかりの上図を並べる。

「初手は13歩にあてて33飛かな」

「こう(43)に角を打つと打歩詰か。34に短打と」

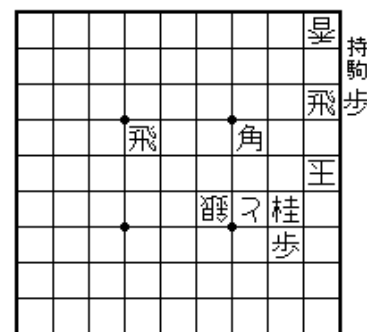
「15玉はピッタリいけそうだね」「じゃあ35玉」

酒が潤滑油になっているのか皆さん頭の回転が速く、あっという間に局面が進む。しかし、35玉の局面からなかなか進まない。角を成って開王手すると25玉、34馬、15玉、13飛成、同香となって結局打歩詰になってしまい、かといって角を生でいくと25玉、34角生、35玉で元に戻ってしまう。

私は山下氏の実戦形作品に悪戦苦闘。そこに穂上武史氏が登場する。

「あ、酔ってないやつがきた」「飲む前に解いてよ」

「ひどいな、飲ませてくださいよ」と言いつつ、氏も輪に加わる。私が根尽きて山下氏に解答を教わっているところで穂上氏が正解を発見した。「あ、なるほどね」と破顔一笑。「よい作品だね」と褒めていただいた。



途中図(13飛生まで)

この作品を見ると、いつもこれを思い出す。楽しきかな詰将棋。柳田明氏には特にお世話になりっぱなしで、詰将棋のあり方も多く学んだし、詰将棋は一人でやるものではない、ということも氏がいなければきっと知るまでに時間がかかっただろう。いつか恩返しができるか、と思っている。

塚田賞受賞作。打歩詰大賞佳作。

(近代将棋 H8・3)